実存的アプローチによるデス・エデュケーションプログラムの効果研究

宮崎 圭子

跡見学園女子大学

キーワード：デス・エデュケーション，実存的アプローチ，時間イメージ，実存性
(ストレス科学研究 2015, 30, 150-156)

Abstract

The present study evaluated the effectiveness of a death-educational program based on an existential approach for improving time and existential attitudes. 15 undergraduate students were assigned to the program. The intervention was composed of one 90 min. session and 3 exercises. All participants saw some parts of a movie where a mother suffers from her son's leukemia. Afterwards, they discussed the reasons the mother's suffering is went away. They completed questionnaires measuring time and existential attitudes before and after the program. The results indicated that the group had improved time and existential attitudes. In addition, it was discussed how they changed in the program.

Keywords: death-education, existential approach, time attitudes, existential attitudes

1. 問題と目的

デス・エデュケーションには大きく分けて二つある¹⁾。一つは、死に直面した人の死への不安を軽減するためのデス・エデュケーションである。二つ目は、健常者に対して死を見つめ今生きていることを感じさせるものである。特に後者のデス・エデュケーションに関して、Deeken は死をタブー視せず身近な問題として考え、生と死の意義を探究し、自覚を持って自己と他者の死にそなえての心構えをさせることの重要性を説く。死をみつめることで時間の貴重さを発見し、人間の創造的次元を刺激し、価値観の見直しと再評価が促されるからである²⁾。

Wong & Tomer は、死の否認はストレスや抑うつのような様々な様相を生むと主張する。さらには死の受容は well-being に達するための適切な方法であるとも述べている³⁾。また、石井は死について考えるこ

とが時間的態度を肯定的に変容させることを実証した⁴⁾。時間的態度とは、過去・現在・未来に対する感情的評価のことである⁵⁾。

一方で、戸田・宮崎は情動的アプローチのデス・エデュケーションプログラムを、Furr のサイコエデュケーション（心理教育）の「6 ステップモデル」⁶⁾をもとに作成した（Table 1）¹⁾。このプログラムのデス・エデュケーションは感情レベルの変化を目的としたものである。サイコエデュケーションと同様⁷⁾，デス・エデュケーションは認知的アプローチのプログラムが多い¹⁾。しかしながら，Furr によれば，サイコエデュケーションはアプローチによって，認知レベル，感情レベル，行動レベル，実存レベル，身体的レベルで変化を起こすことができる⁶⁾。また，成瀬は適度なレベルのイメージを適切に表出し体感することで，その人の現実性が高まると主張している⁸⁾。上述した戸田・宮崎が作成した情動的アプローチのデス・エデュケーションの効果を検討したところ，1%水準で時間イメー

Effectiveness of a death-educational program based on an existential approach

Keiko Miyazaki

Atomi University

Table 1 Furr によるサイコエデュケーション 6 ステップモデル⁶⁾

ステップ 1	目的の宣言
ステップ 2	ゴール
ステップ 3	目標 (ゴールのための)
ステップ 4	コンテンツ
ステップ 5	エクササイズ
ステップ 6	評価

ジと未来イメージが、0.1%水準で現在イメージがポジティブな方に変化した。死を感じることで時間の貴重さを感じ、現在と未来がポジティブに変化したと考察した。

先述したように、サイコエデュケーションはアプローチによって、認知レベル、感情レベル、行動レベル、実存レベル、身体的レベルで変化を起こすことができる⁶⁾。認知的アプローチのデス・エデュケーションは少なからず報告されている。情動的アプローチのデス・エデュケーションのプログラムは戸田・宮崎が作成した¹⁾。では、実存的アプローチ、つまり実存レベルの変化を起こすデス・エデュケーションは可能だろうか。

実存とは「特に人間の実存を意味し、自己の存在に関心をもつ主体的な存在、絶えざる自己超克を強いられている脱自的存在をいう」と説明されている⁹⁾。実存主義とは、日常生活において自身を「主体的な存在」として捉え、他ならぬ自分自身の人生を主体的に生き抜く存在であり続けることなのである。そして、心理療法における実存主義的アプローチでは、主体としての自分自身について少しずつ気づいていくことが強調されるのである¹⁰⁾。実存主義では、自身の実感にもとづいて行動し、自身にとって意味ある行動をし、それゆえに己の行動の全責任を引き受けることを良しとする¹¹⁾。そこには、人間とは自ら決断することのできる主体であり、生きているただ中においてさえ自分を変えることのできる存在とみる人間観がある¹²⁾。人生には一般的解答のない、避けられない問題がある。例えば、死、孤独、生きる意味などである。人とは、これらの問題に自ら独自の答えを出して生きていかねばならない存在なのである¹³⁾。そのため、実存主義的アプローチでは価値観を論ずることになる¹⁴⁾。

また、Prochaska & Norcross は、無意味であること、孤立、孤独、有限性が不安をもたらす条件であると説く。死は時間の有限性の反映であり、自己は力の限界を示していることが実存不安を生み出すのである¹⁰⁾。人は運命的な死から逃れることはできない。同様に孤独等に陥る可能性も持っている。なおかつ、選択の自由も持ち、さらにはそれに対して責任を負わねばなら

ない。このような現実のなかで、人が感じる不安を実存不安という¹⁴⁾。

実存において、実存不安の根源である「死」(死のタブー視とつながる)と、「主体的に生きること」は重要な概念として捉えることができる。先述したように、Deeken が主張するデス・エデュケーションの意義は、死をタブー視せず向き合うことで、価値観の見直しと再評価が促されるからであった²⁾。そのため実存主義とデス・エデュケーションには共通するものがあると考えられる。有限性を意味する死に向き合うデス・エデュケーションにおいて、「主体的に生き、そしてその生きる意味を見出す」ようなプログラムを作成することで、Furr が主張する実存レベルの変化を引き起こせるのではないだろうか⁶⁾。さらには、実存不安の根源である「死」(死のタブー視とつながる)と向き合うことによって、Wong & Tomer が主張するストレス³⁾も軽減されるのではないだろうか？

以上より本研究の目的は、実存的アプローチのデス・エデュケーションプログラムの作成と、その効果を検討することとした。

2. 方 法

2.1 対象者

関東圏内 X 女子大学学部 3 年生 15 名が本デス・エデュケーションプログラムに参加した。このデス・エデュケーションのプログラムは、サイコエデュケーションの枠組みで構成されている。Corey は、サイコエデュケーションのグループサイズは、1 人の専門家に対して 4 人～8 人が理想であると報告している¹⁵⁾。今回、15 名ということでは若干多いが、後述している予備実験(14 名)の結果を踏まえ、15 名でも可能と判断した。

2.2 実施時期

2014 年 6 月下旬に実施した。

2.3 質問紙内容

2.3.1 時間イメージ尺度¹⁶⁾

時間的展望とはある一定の時点における個人の心理学的過去および未来についての見解の総体のことである¹⁷⁾。都筑は、イメージや態度の測定方法として知られる Semantic Differential Method (SD 法)を使って、この時間的展望が評価される時間イメージ尺度を作成した¹⁶⁾。過去、現在、未来のそれぞれのイメージは、各 20 の形容詞対から成り、合計 60 項目を 7 段階で評定する。Table 2 に示した。本尺度を採用したのは、時間イメージ(現在イメージ)がストレス反応

Table 2 時間イメージ尺度項目(過去, 現在, 未来各20項目)¹⁶⁾

1	楽しくない－楽しい
2	空虚な－満ち足りた
3	恐ろしい－すばらしい
4	魅力のない－魅力のある
5	冷たい－あたたかい
6	暗い－明るい
7	希望のない－希望のある
8	遅い－速い
9	困難な－容易な
10	遠い－近い
11	重要でない－重要な
12	短い－長い
13	小さい－大きい
14	悪い－良い
15	単調な－変化に富んだ
16	あいまいな－はっきりした
17	不安定な－安定な
18	とじた－あけはなした
19	活気のない－生き生きした
20	受身的な－能動的な

と負の強い相関があるからであり¹⁸⁾、回答するのに負担がかからないからである。「あなたご自身の現在(過去, 未来)をイメージしてください。下の〈各対の表現〉を見て、一番よく当てはまるところの数字の*に、1つだけ○をつけてください。」という指示であった。それぞれ20項目からなる現在, 過去, 未来の合計点を20で除したものを下位尺度得点とし、現在イメージ, 過去イメージ, 未来イメージとした。また、60項目の合計点を60で除したものを時間イメージとした。

2.3.2 Life Attitude Profile (LAP)¹⁹⁾

LAPは、「人生の意義と目的を見出している割合」と「人生の意義と目的を見出そうとする動機の強さ」を評定するために、Reker & Peacockが7段階評価・49項目で作成した尺度である²⁰⁾。この日本版のLAP(3)は7因子29項目からなる¹⁹⁾。このうち、実存度を測定できると判断した第5因子「人生の意味と目的の欲求」(3項目)、第6因子「人生の統御」(3項目)を用いた。Table 3に示す。「あなたの今の気持ちや考

えについてお聞きします。以下の項目について、最も当てはまるところに○印をつけて下さい。」と教示し、7段階評定するように求めた。それぞれ第5因子、第6因子の合計点を3で除したものを下位尺度得点とし、人生の意味と目的の欲求、人生の統御とした。

なお、回答時間を統一するために、質問紙回答はすべて強制速度法で行った。

2.3.3 その他

フェースシート(つらい死別経験の有無、死に対する関心など)、死生観尺度(7因子27項目)の項目にも回答を求めている。しかしながら、本研究の目的外の尺度により、本論文の分析対象から除外した。そのため、ここでは詳細は省略する。

2.4 実存的アプローチのデス・エデュケーションプログラムの構成

サイコエデュケーション(心理教育)とは「臨床フレームでは解決できなくなった個々人の心理的かつ多様な問題に対処する、教育フレーム(心理的なスキルを教授することに焦点を当てる)からの広い意味でのカウンセリングのアプローチである」と定義される²¹⁾。デス・エデュケーションは、サイコエデュケーションの枠組みで考えることができる¹⁾。Furrのサイコエデュケーションの「6ステップモデル」⁶⁾(Table 1)に基づき、以下のように作成した。

ステップ1: 目的の設定

実存的アプローチのデス・エデュケーションを通して、「死」を見つめて「主体的に生きる」ということを考えることとした。

ステップ2: ゴールの決定

「時間イメージ」をポジティブな方へ変化させ、かつ実存度をあげる。

ステップ3: (ゴールのための) 目標の設定

①映像を観て、感じたことの整理をする。

②「主体的に生きる」を議論し内省する。

③「主体的に生きる」に対する他者の意見をシェアリングする。

ステップ4: 内容の選択

実存的なアプローチの内容とする。つまりは、死と

Table 3 Life Attitude Profile (第5因子, 第6因子)¹⁹⁾

第5因子: 人生の意味と目的の探求	私は常に人生の意味を知りたいと思っています
	私は常に、自分の人生で自己とは何かを知りたいという強い気持ちを持っています
	私はいつも人生の意味・目的そして使命を探し続けています
第6因子: 人生の統御	私の生き方は、自分の意志で決定したものです
	私の人生でやれることは、大部分私自身の努力で達成できます
	私は人に左右されることなく、自分の人生を生きたいように生きることができます

Table 4 本デス・エデュケーションのプログラムの手順

手順番号	内容	所要時間
1	・実験者の自己紹介 ・資料の配布:A4サイズの封筒に入った資料(質問紙,「ジョーイ」のあらすじ,ディスカッション時の教示文,「ジョーイ」の感想を記述する用紙,デス・エデュケーションプログラムの感想を記述する用紙) ・デス・エデュケーションの概要説明とディスカッション時のグルーピング	約 5 分
2	pre 質問紙に記入	約 10 分
3	エクササイズ 1: 視聴覚刺激動画「ジョーイ」(母親の葛藤場面)を見る, 感想を記述	約 15 分
4	エクササイズ 2: 視聴覚刺激動画「ジョーイ」(スピーチシーン)を見た後ディスカッション	約 30 分
5	全体シェアリング	約 10 分
6	post 質問紙および最終の感想を記入	約 15 分

向き合う事で,主体的に生きる事とは何かを考えさせる。そのために,1997年公開の実話をもとにした映画「ジョーイ」を採用。当時,不治の病であった白血病に罹った11歳の息子ジョーイは,非常に辛い治療を続けている。それを間近に見続けている母親は,治療することを選択したことが正しい道であるのかと葛藤する。その葛藤の中で,母親はその答えを見出すというストーリー。この映画を選んだ理由は,「母親のその答え」の内容を明らかにせず映画が終わるという展開にある。「母は二度と迷わなかった。」旨の姉(役)のナレーションが入るだけである。視聴者にその答えを想像させる,考えさせる余地があると考えたからである。その映像を見せて,人生とは一般的解答のない問題に自ら独自の答えを出して生きていかねばならないものであること¹³⁾,そうすることが主体的に生きる事に繋がるということ¹⁰⁾を考えさせる。

ステップ5:エクササイズのデザイン

- ①母親が葛藤に苦しむという場面。参加者はその場面を観て,感想を書く。
- ②ジョーイの母親がそれまでの葛藤に「答え」を見出すシーンを観る。その後,参加者はグループディスカッションをする。ディスカッションのテーマは「なぜ母親は二度と迷わなかったのか?」とした。
- ③最後に全体でシェアリング。
エクササイズとして,ライティングとグループディスカッションを採用した。Furrは実存レベルでの変化を目的としたサイコエデュケーションプログラムの鍵となるものは,体験活動とその活動を自身のなかで加工処理すること(つまり,体験を言語化したり,議論すること等)だと主張しているからである⁶⁾。

ステップ6:評価

時間イメージ尺度¹⁶⁾,Life Attitude Profile¹⁹⁾を用いる。

2.5 予備実験

事前に2014年5月中旬,関東圏内X女子大学大学院修士課程1年生14名に予備実験を実施した。その目的はディスカッションのエクササイズが促進される要因を探ること,使用する映像が適切であるかの判断を行う,以上の2点であった。その予備実験の結果,ディスカッションの時間を15分に,グループ人数を3人組みに変更した。ディスカッションの教示文内容を加筆し,配付するとともに口頭で読み上げるスタイルに変更した。さらにディスカッションの前に参加者が自身の感情に向き合い文字に表現するエクササイズを追加した。本プログラムをTable4に示す。

なお,予備実験前後を通して,臨床心理学専攻の大学院生2名および臨床心理学専攻の教員1名で検討しながら,プログラムの作成を行った。

本研究は筆者の所属している大学の倫理委員会において厳正な審査を受け承認されている(承認番号14006)。

3. 結 果

3.1 実存的アプローチのデス・エデュケーションの効果検討

本デス・エデュケーションプログラムの効果を検討するために,対応のあるt検定を行った。従属変数は,時間イメージ(過去,現在,未来),LAP,および各尺度のそれぞれの質問項目(計66項目)である。なお,サンプル数が25名以下のため,多変量分散分析を使用しなかった²²⁾。結果をTable5に示す。時間イメージ,未来イメージが有意にポジティブな方へ変化した。現在イメージが有意にポジティブな方へ変化する傾向,人生の統御が有意に増加する傾向が認められた。また,人生の統御の質問項目「私の人生でやれることは,大部分私自身の努力で達成できます」「私は人に左右されることなく,自分の人生を生きたいように生

Table 5 対応のある t 検定結果

		pre		post		t 値
		M	SD	M	SD	
第5因子	人生の意味と目的の欲求	4.44	1.09	4.62	1.10	1.29
第6因子	人生の統御	4.58	0.74	4.96	0.17	1.91 [†]
第5因子の項目	私は常に人生の意味を知りたいと思っています	4.47	1.55	4.87	1.46	1.87 [†]
	私は常に、自分の人生で自己とは何かを知りたいという強い気持ちを持っています	4.80	1.27	4.87	1.51	0.29
	私はいつも人生の意味・目的そして使命を探し続けています	4.07	1.22	4.13	0.92	0.44
第6因子の項目	私の生き方は、自分の意志で決定したものです	4.73	1.39	4.93	0.96	0.59
	私の人生でやれることは、大部分私自身の努力で達成できます	4.67	0.98	5.07	1.16	2.45*
	私は人に左右されることなく、自分の人生を生きたいように生きることができます	4.33	1.05	4.87	0.83	2.26*
時間イメージ	時間イメージ	4.23	0.75	4.61	0.80	2.49*
	現在イメージ	4.36	0.97	4.73	0.97	1.80 [†]
	過去イメージ	3.53	1.06	3.95	1.20	1.76
	未来イメージ	4.81	0.82	5.14	0.93	2.48*
現在イメージ	単調な－変化に富んだ	4.13	1.36	5.07	1.16	2.29*
	不安定な－安定な	3.67	1.95	4.53	1.36	2.58*
	遅い－速い	4.07	1.39	4.40	1.30	1.78 [†]
	悪い－良い	4.60	1.06	5.13	1.06	2.09 [†]
過去イメージ	悪い－良い	3.07	1.39	4.00	1.65	2.71*
	不安定な－安定な	2.60	1.50	3.67	1.59	2.87*
	とじた－あけはなした	3.00	1.56	3.80	1.66	2.26*
	恐ろしい－すばらしい	3.73	1.16	4.27	1.10	2.09 [†]
	遅い－速い	3.53	1.13	4.20	1.47	2.00 [†]
	短い－長い	4.87	0.92	4.20	1.08	2.00 [†]
	活気のない－生き生きした	3.20	1.70	4.07	1.83	1.99 [†]
未来イメージ	魅力のない－魅力のある	5.00	1.25	5.47	1.19	2.17*
	短い－長い	4.27	1.28	4.87	1.25	2.80*
	あいまいな－はっきりした	4.33	1.05	4.93	1.16	2.36*
	楽しくない－楽しい	5.20	1.08	5.60	1.06	1.87 [†]
	小さい－大きい	4.47	1.41	4.93	1.10	1.83 [†]
	悪い－良い	5.13	1.06	5.47	1.06	2.09 [†]
	とじた－あけはなした	4.60	0.91	4.93	1.44	1.78 [†]

(*: $p < .05$, [†]: $p < .10$)

ることができます」が増加していた。現在イメージが「変化に富んだ、安定な」方へ、過去イメージが「良い、安定な」方へ、未来イメージが「魅力のある、長い、はっきりした」方へ変化していた。

4. 考 察

4.1 実存的アプローチによるデス・エデュケーションプログラムの効果検討

人生の統御、時間イメージ、現在イメージ、未来イメージがポジティブな方へ変容した。特に、人生の統御が増えた傾向が確認できた。また、人生の統御の質問項目「私の人生でやれることは、大部分私自身の努力で達成できます」「私は人に左右されることなく、

自分の人生を生きたいように生きることができます」が増加したことも認められた。実存的アプローチは、先述したように人間とは自ら決断することのできる主体であるとする考えをもっている。本プログラムは Furr がいうところの実存レベル⁶⁾ での変化が起きたと考えてよいだろう。

このことは、3回（母親の葛藤シーン直後・「なぜ母親は二度と迷わなかったのか？」をテーマにグループディスカッション直前・最終の感想）に渡って記述してもらったコメントによっても推察される（Table 6）。殆どの参加者が「生きること」について色々考えさせられたとコメントしていた。さらには、ストレス反応と負の相関がある現在イメージ¹⁸⁾ がポジティブな方へ変容したことは、本プログラムがストレ

Table 6 参加者の質的变化

参加者	母親の葛藤シーン直後の感想	なぜ母親は二度と迷わなかったのか？	最終の感想
Aさん	お母さんの葛藤する気持ちがとても良く伝わりました。薬を使わずに楽に死なせてあげたいと思いつつも延命してほしい、そんな気持ちだと感じました。…(省略) …ジョーイは未来に対しての希望を見いだせていないように見えて「どうせ僕は死んでしまう」と絶望しているようにも見えました。私でもどちらがいいか想像もつきませんでした。	ジョン(兄)にとってもお母さんにとっても家族であることは変わらないのだから一生懸命に生きているジョーイのために、自分も一生懸命生きていこうと思ったのではないかと思いました。	自分の生きている意味が分からないことがあるが、あせらなくても、自分から信じて実行すれば、いい未来につながるのではないかと思いました。
Bさん	…(省略) …自然な死を待つのか辛い治療をするか非常に難しい選択であるため、私も子供ができてこの選択をせまられたら迷うしどちらを選んでも泣いて悔やむと思った。自分の家族や大切な人たちがジョーイのようになっただらジョーイの家族のように私はきちんと向き合えるのだろうか、逃げてしまふのではないだろうかと心配になった。	お兄ちゃんがジョーイに賞を渡したことによつてまわりの人がたたえてくれて、お母さんはこの選択をして良かったんだと確信できたからだと思います。お兄ちゃんがスピーチを通して母をほめた。	生きていることと死ぬことについて考えさせられた。映画をみて気持ちを整理して(シェアリングをして)から質問紙をやってみるとジョーイと自分を比べて書いてしまった。
Cさん	まず、弟ジョーイは死についてどのような考えを持っているのかが気になりました。…(省略) …お母さんは治療を受けさせず自然な死を待つべきだったのではないかと考えていました。私が、私はそのようには思いません。仮にジョーイが自然な死を迎えることを望んでいたとしても、こんなに暖かい家族に囲まれるのだから、家族の“ジョーイに長生きして欲しい”という気持ちは伝わっていると思うからです。また、先程のアンケートの後だからかもしれませんが、“自分がジョーイだったかどうか”と、“死”について考えている自分がいました。私だったら、生存できる可能性があるのではあればツラくても治療を続けると思えます。	ジョン(兄)のスピーチを聞いて、ジョーイが家族に与えていたものの大きさが分かったから、それによってジョーイが少しでも長く生きてくれることで、ジョーイ自身も家族も幸せになれると気が付いたからだと思います。	映画を見る前と後では、“生きる”ことについて大きく考えが変わりました。私は過去に病気を患っていたので、未来や現在の方が、明るくすばらしいものであるとアンケートに答えました。しかし映画を見て、“死”というもののについて考えさせられました。私はまだ“生きる”という道しかなかったので、もともと可能性はあるのだと感じました。考えが前向きになった気がします。

スを軽減させる可能性があることも示唆している。

本プログラムでは「なぜ母親は二度と迷わなかったのか？」のテーマでグループディスカッションするエクササイズを採用した。テーマが難しかったのか、ディスカッション形式そのものが難しいエクササイズであったのか、期待していたような活発な議論とはなかった。グループ内で自身の意見を披露しグループシェアリングしたという印象であった。「グループで無理に意見をまとめなくてよい」と教示したことが原因かもしれない。「グループで意見をまとめてほしい」と教示した方が活発な議論展開になったのかもしれない。

4.2 今後の課題

本研究の参加者は女子大生 15 名であった。男性、成人期、思春期など多様なグループに対しての効果を検証することが今後の課題となるだろう。また、統制群の設定をしての効果検証も必要であろう。

文 献

- 1) 戸田恵美子, 宮崎圭子, 「今を生きる」デス・エデュケーションプログラムの効果研究—死別経験・死への関心との関連—, 跡見学園女子大学附属心理教育相談所紀要 11, 31-41, 2014.
- 2) Deeken, A., 死とどう向き合うか. NHK 出版, 1996.
- 3) Wong, P. P., Tomer, A., Beyond terror and denial: The positive psychology of death acceptance. *Death Studies* 35, 99-106, 2011.
- 4) 石井 僚, 青年期において死について考える事が時間的態度に及ぼす影響. *教育心理学研究* 61, 229-238, 2013.
- 5) 白井利明, 時間的展望の生涯発達に関する研究の到達点と課題. *大阪教育大学紀要* 42, 187-216, 1994.
- 6) Furr, S. R., Structuring the group experience: A format for designing psychoeducational groups. *Journal for specialists in group work* 25, 29-49, 2000.
- 7) 宮崎圭子, サイコエデュケーションの理論と実際. 遠見書房, 2013.
- 8) 成瀬悟策, 自己コントロール法. 誠信書房, 1988.
- 9) 新村出編, 広辞苑第 6 版. 岩波書店, 2008.
- 10) Prochaska, J. O., Norcross, J. C., *Systems of Psychotherapy A Transtheoretical Analysis*. Brooks: Cenegage Learning Co., 2007. (津田 彰, 山崎久美子監訳, 心理療法の諸システム—他理論統合的分析—. 金子書房, 2010.)
- 11) 上嶋洋一, 実存主義. 國分康孝編, カウンセリング辞典. 誠信書房, 1993.
- 12) 諸富祥彦, 実存主義的アプローチ. 國分康孝編, カウンセリング辞典. 誠信書房, 1993.
- 13) 國分康孝, カウンセリングの理論. 誠信書房, 1993.
- 14) 正保春彦, 実存的不安. 國分康孝編, カウンセリング辞典. 誠信書房, 1993.
- 15) Corey, G., *The theory and practice of group counseling* (5th ed.). Pacific Grove, CA: Brooks/Cole., 1999.
- 16) 都筑 学, 大学生における自我同一性と時間的展望. *教育心理学研究* 41, 40-48, 1993.
- 17) Lewin, K., *Field Theory and Social Science*. New York: Harper, 1951. (猪股佐登留訳, 社会科学における場の理論. 誠信書房, 1974.)
- 18) 宮崎圭子, 9 分割統合絵画法のサイコエデュケショナル・グループワークへの応用—就労学生達への援助アプローチ—. *産業カウンセリング研究* 7, 17-23, 2004.
- 19) 中村昭之, 林 潔, 板津裕己, 人生に対する態度の研究 (2) —LAP (Life Attitude Profile) の研究—. *駒沢社会学研究* 20, 93-129, 1988.
- 20) Reker, G. T., Peacock, E. J., *The Life Attitude Profile (LAP): A Multidimensional Instrument for Assessing Toward Life*. *Canadian J. of Behavioral Science* 13(3), 264-273, 1981.
- 21) 岡林春雄, 心理教育—psychoeducation—. 金子書房, 1997.
- 22) Kirk, R., *Experimental Design*. Pacific Grove, Ca: Brooks/Cole Publishing, 1982.